

地方都市におけるまちなかの役割 －佐賀県多久市を事例として－

佐賀大学経済学部 准教授 戸田 順一郎

1. はじめに

地方都市における中心市街地の衰退やまちなかの空洞化の問題が叫ばれるようになって久しい。実際、空き店舗の並ぶ商店街や、人通りがまばらなまちなかの光景は見慣れたものとなっている。その一方、人口減少や少子高齢化が進むなか、近年まちなかの果たす役割への期待が高まっていることも事実である。

本稿で取りあげる佐賀県多久市は、基幹産業であった石炭産業の発展により 1960 年には人口が 45,627 人にまで増加したものの、炭鉱閉山により 1970 年には 26,785 人にまで急減した。その後は居住環境の整備等により若干の増加が見られたものの、1985 年以降は再び減少に転じ、2015 年には 19,749 人と 2 万人を割るに至っている（多久市、2015）。こうした人口減少の影響もあり、中心市街地はかつての活気を失っている。

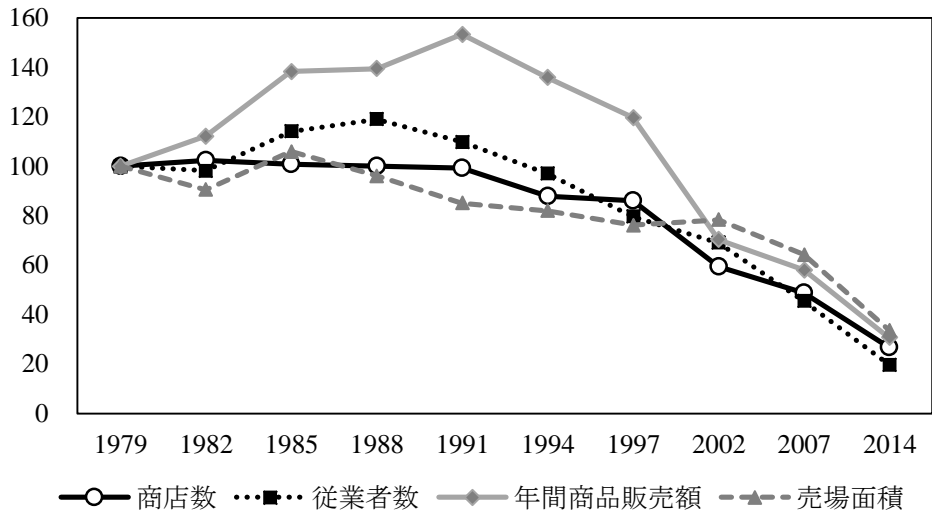
そこで本稿では地方都市におけるまちなかの役割について、多久市中心市街地を事例として考察することを課題とする。以下ではまず中心市街地の実態について統計的なデータの把握・分析を行い、次いで多久市民における中心市街地の利用状況および中心市街地に対する印象、評価、将来像についてアンケート調査をもとに検討を行う。

2. 多久市中心市街地の変化

まず『商業統計調査』（各年版）の立地環境特性格別統計編をもとに多久市中心市街地の変化について見ていく。

図 1 は、多久市中心市街地の商業機能の変化について、商店数、従業者数、年間商品販売額、売場面積の変化を示している。商店数については、1991 年まではほぼ横ばいで推移し、その後減少に転じ 1997 年以降は大幅に減少している。従業者については、1988 年をピークに増加し、その後は減少している。年間商品販売額については、ピークは 1991 年であり、増加の割合は 4 つの指標のなかでは最も大きい。しかしながらその後は大幅に減少し 2014 年にはピーク時の約 5 分の 1 となっている。売場面積は 1985 年がピークで、2000 年代に入り減少幅が大きくなっている。

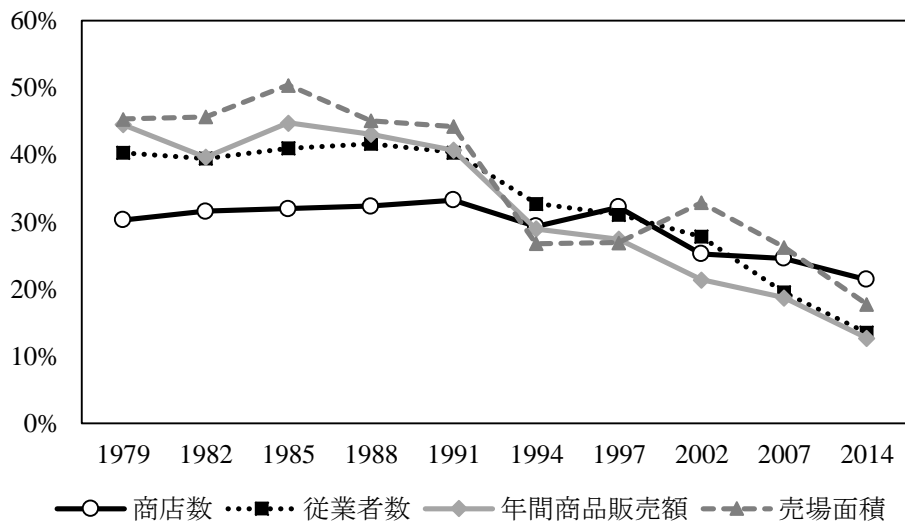
図1 多久市中心市街地の商業機能の変化（1979年=100）



出所：『商業統計調査』（各年版）

図2は、商店数、従業者数、年間商品販売額、売場面積について、多久市全体に占める中心市街地の割合の変化を示している。商店数は、1997年までは30%前後で推移しているものの2000年代に入ると急減している。従業者数は、1991年までは約40%を占めていたがその後減少に転じ、2014年には14%となっている。年間商品販売額も同様に、1991年までは約40%を占めていたがその後減少し、2014年には13%にまで落ち込んでいる。売場面積は1985年には50%を占めるまでに増加したが1991年以降は急減している。商店数以外の3つの指標がいずれも1991年以降大幅に割合を低下させており、この頃から中心市街地の商業の中心性が急速に失われてきたことがわかる。

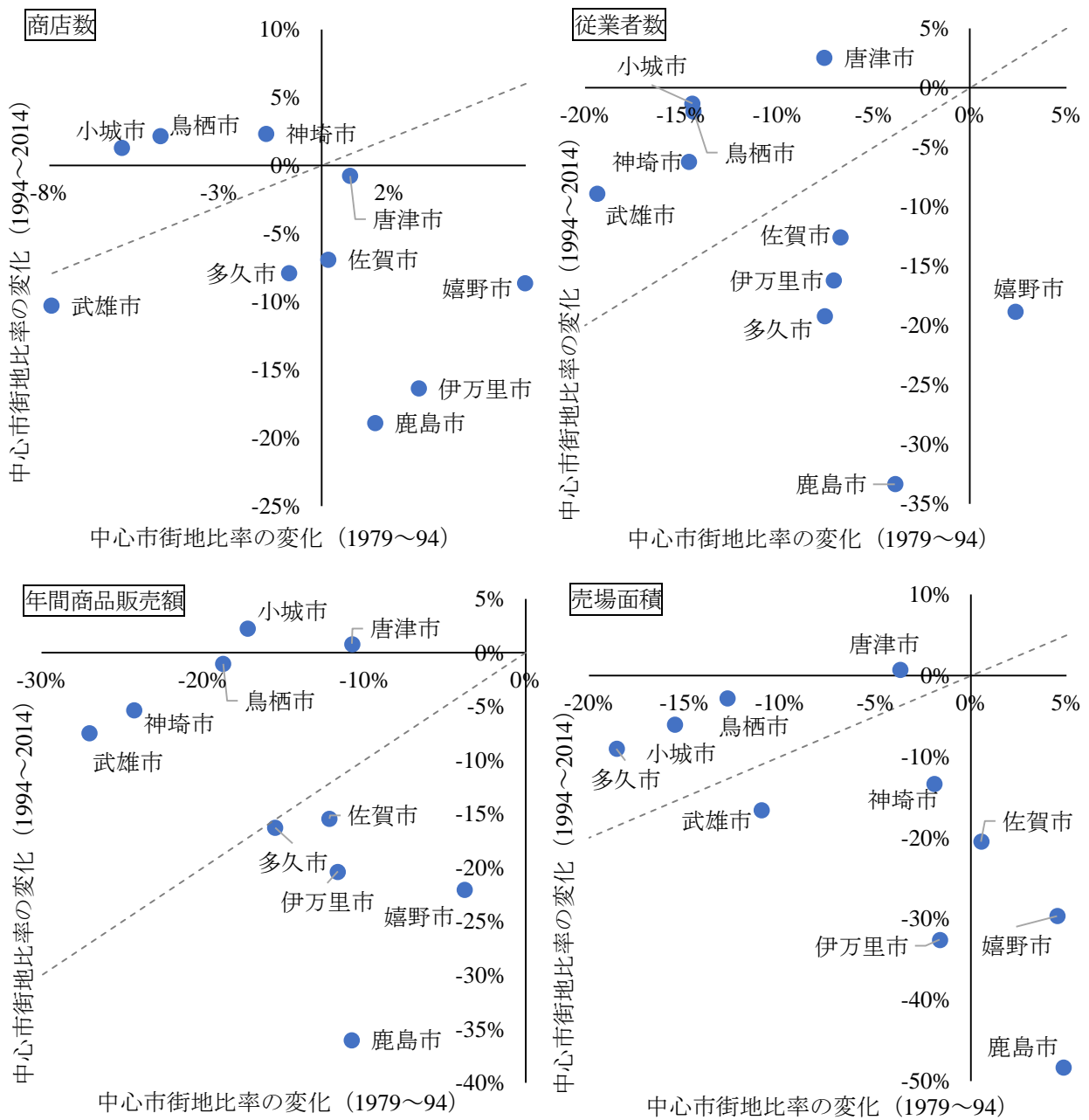
図2 多久市中心市街地の商業機能の変化（市全体に占める中心市街地の割合の変化）



出所：『商業統計調査』（各年版）

図3は、県内10市における商店数、従業者数、年間商品販売額、売場面積の中心市街地比率（市全体に占める割合）について「1979年から1994年の変化率」と「1994年から2014年の変化率」を比較したものである^(注1)。いずれの自治体も中心市街地比率は減少しているものの、大きく減少した時期に違いがあることがわかる。このことが典型的に表れている年間商品販売額を見ると、3つのグループに分けることができる。第1は1979～94年の減少が大きい武雄市、神埼市、鳥栖市、小城市、唐津市である。これらの自治体は比較的早くから中心市街地の衰退がすすみ、近年は維持もしくは改善が見られる。第2は1994～2014年の減少が大きい鹿島市、嬉野市である。これらは1990年代半ば以降に中心市街地衰退が深刻化した自治体である。第3は両期間で減少が見られる佐賀市、多久市、伊万里市である。

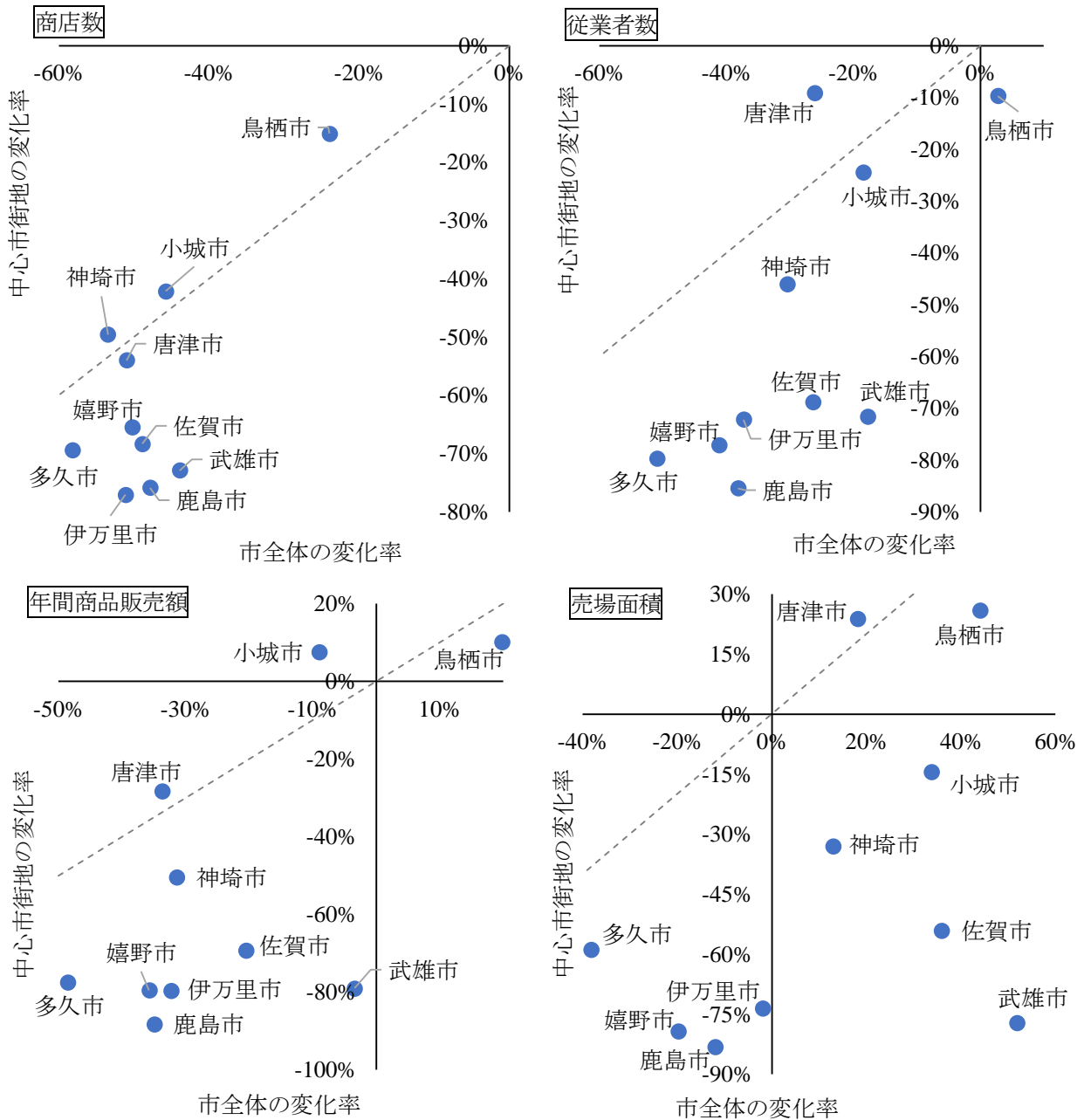
図3 県内10市における中心市街地衰退時期の比較



出所：『商業統計調査』（各年版）

図4は、佐賀県内10市の1994～2014年における商店数、従業者数、年間商品販売額、売場面積の変化について中心市街地と市全体とを比較したものである。いずれの指標においても、大半の自治体で中心市街地の方が市全体よりも大きく減少しており、この間の中心市街地の衰退を示している。

図4 県内10市における中心市街地と市全体の商業機能の変化率の比較（1994～2014年）



出所：『商業統計調査』（各年版）

商店数の変化では、武雄市、鹿島市、伊万里市、佐賀市、嬉野市において、市全体と比較した中心市街地の減少が特に大きくなっている。他方、鳥栖市、神崎市、小城市では、中心市街地の減少が市全体よりも若干ではあるが小さくなっている。同指標は市全体と中心市街地ともいずれの自治体においても減少しているが、中心市街地と市全体の乖離は4つの指標のなかで最も小さい。多久市の市全体の減少率は58%と10市中最も大きく、中心市街地の減少率も69%と大きい。

従業者数の変化では、唐津市を除くすべての自治体において市全体と比べ中心市街地の減少率が大きくなっており、なかでも武雄市、佐賀市、伊万里市、鹿島市、嬉野市、多久市において、中心市街地の相対的な減少率が大きくなっている。

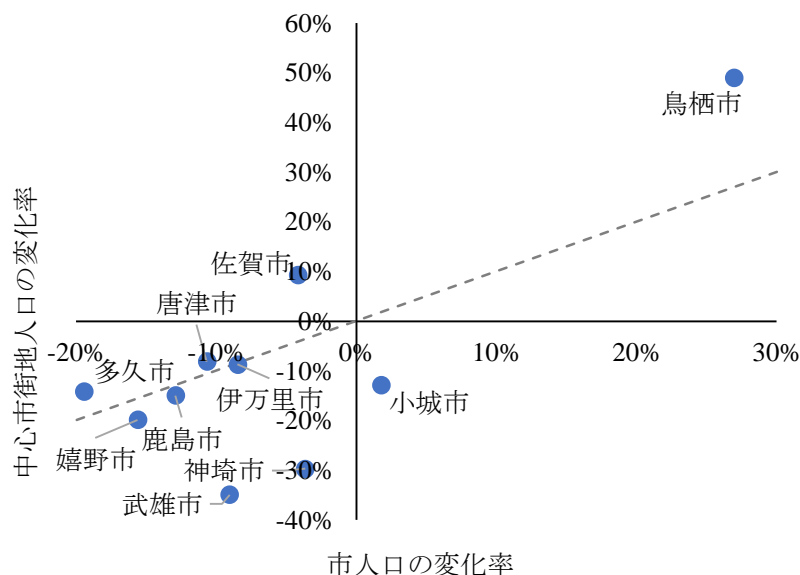
年間商品販売額の変化を見ると、武雄市、佐賀市、伊万里市、鹿島市、嬉野市において、市全体と比較した中心市街地の減少が特に大きくなっている。中心市街地の増加率が市全体の増加率を下回っている鳥栖市も同様のことが言える。多久市は中心市街地および市全体の減少率がいずれも高く、市全体の減少率は10市中最も大きい。

また売場面積の変化を見ると、大半の自治体で中心市街地の減少率が市全体を上回っていることについては年間商品販売額の変化と同様であるものの、中心市街地の相対的な減少幅が大きくなっている。中心市街地外に大型商業施設が立地している武雄市、佐賀市では、市全体が増加しているのに対し中心市街地は減少している。

次に、国勢調査の小地域データを用いて中心市街地の居住人口の変化を見る。

図5は、県内10市の市人口と中心市街地人口の変化率（1995～2015年）を比較したものであるが^(注2)、変化率の違いにより3つのグループに分けることができる。

図5 県内10市における市人口と中心市街地人口の変化率の比較（1995～2015年）



出所：『国勢調査報告』（各年版）

第1は、中心市街地人口が増加している自治体である（鳥栖市、佐賀市）。鳥栖市は、市人口は増加しているが、中心市街地人口はそれを上回るペースで増加している。佐賀市は、市人口は減少し続けているものの中心市街地人口は2000年以降増加に転じている。これらの自治体では、中心市街地にマンションなどの集合住宅等が立地し、まちなか居住が進展している。第2は、市人口と比べ、中心市街地人口が減少している自治体である（武雄市、神崎市、小城市）。これらの自治体では居住地の郊外化が起こってきたことがわかる。第3は、市人口の減少率と中心市街地人口の減少率に大きな差がない自治体である（多久市、嬉野市、鹿島市、唐津市、伊万里市）。ただし、多久市と唐津市は、中心市街地の減少率が市全体の減少率より下回っている。唐津市は、市人口は減少し続けているものの中心市街地人口は2000年以降ほぼ横ばいで推移している。多久市は、中心市街地人口自体は減少しているものの中心市街地人口が占める割合は増加している。

表1は、多久市中心市街地における年齢3区分人口の変化を示している。市全体と中心市街地の人口構成（2015年）を見ると、15歳未満人口の割合は市全体が12.0%であるのに対し中心市街地は16.0%と高く、15～64歳人口の割合も市全体が55.6%であるのに対し中心市街地は60.6%と高くなっている。一方65歳以上人口の割合は市全体の31.9%に対し中心市街地は23.1%と低く、市全体に比べ中心市街地の高齢化率が低い。

表1 多久市中心市街地における年齢3区分人口の変化

	総数		15歳未満		15～64歳		65歳以上	
	市全体	中心市街地	市全体	中心市街地	市全体	中心市街地	市全体	中心市街地
1995年	総数	24,507	4,298	469	14,880	1,627	5,329	402
	構成比	100.0%	17.5%	18.8%	60.7%	65.1%	21.7%	16.1%
	指数	100	100	100	100	100	100	100
2000年	総数	23,949	3,771	473	14,291	1,585	5,887	459
	構成比	100.0%	15.7%	18.8%	59.7%	63.0%	24.6%	18.2%
	指数	98	88	101	96	97	110	114
2005年	総数	22,739	3,212	472	13,467	1,533	6,052	471
	構成比	100.0%	14.1%	19.0%	59.2%	61.9%	26.6%	19.0%
	指数	93	75	101	91	94	114	117
2010年	総数	21,404	2,869	423	12,563	1,454	5,970	466
	構成比	100.0%	13.4%	18.0%	58.7%	62.0%	27.9%	19.9%
	指数	87	67	90	84	89	112	116
2015年	総数	19,749	2,367	343	10,981	1,299	6,300	495
	構成比	100.0%	12.0%	16.0%	55.6%	60.6%	31.9%	23.1%
	指数	81	55	73	74	80	118	123

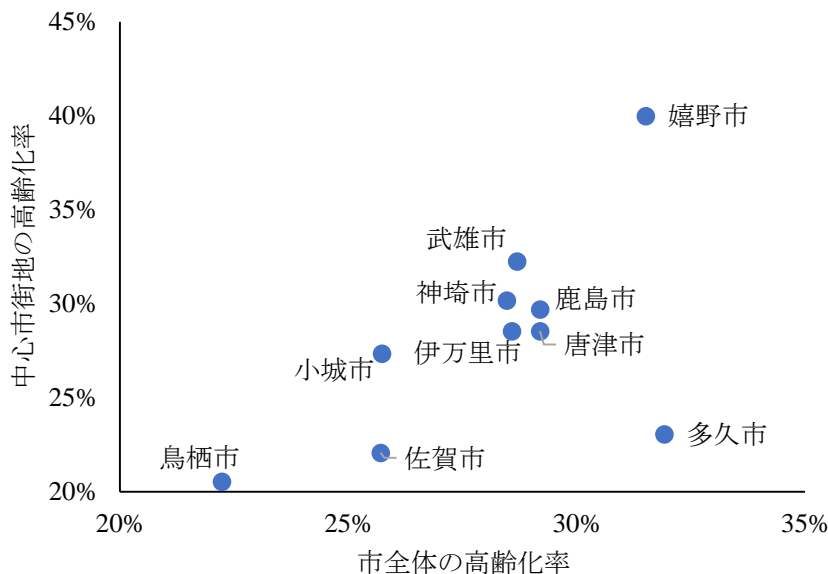
注：指数は1995年＝100である。

出所：『国勢調査報告』（各年版）

また図6は、県内10市における市全体と中心市街地の高齢化率（65歳以上人口比率）を比較したものである。これによれば、市全体よりも中心市街地の高齢化率が低いのは、多久市、佐賀市、鳥栖市、唐津市の4

自治体であり、なかでも多久市はその差が最も大きい。中心市街地に幅広い年齢の人々が相対的に多く居住している点は、多久市中心市街地の特徴であると言える。

図6 県内10市における市全体と中心市街地の高齢化率の比較（2015年）



出所：『国勢調査報告』（各年版）

3. 住民にとっての中心市街地—住民アンケートをもとに—

多久市民を対象に中心市街地に関するアンケート調査を2019年5月31日～6月19日に実施した。本アンケート調査は、統計データでは捉えることができない中心市街地の利用状況および中心市街地に対する印象、評価、将来像など把握することを目的としたものである。アンケート調査の概要については表2、アンケート回答者の基本項目に関する集計結果については表3にまとめた。

表2 アンケート調査の概要

調査対象地域	多久市全域
配布票数	2,000件
回収数	555件（回収率27.8%）
調査期間	2019年5月31日～6月19日
標本抽出方法	北多久町（筋原、砂原）、北多久町（その他）、東多久町、南多久町、多久町、西多久町の6地域について、世帯数に基づき配分数を按分し、各地域の配分数に応じて配布対象行政区を抽出した（集落抽出法）。なお筋原、砂原の2行政区を中心市街地として処理した。
調査方法	対象行政区全戸配布、郵送回収

出所：アンケートデータに基づき筆者作成

表3 アンケート回答者の基本項目の集計結果

(1) 年齢	度数	%
20歳未満	0	0.0%
20～29歳	6	1.1%
30～39歳	32	5.8%
40～49歳	47	8.5%
50～59歳	108	19.5%
60～69歳	178	32.1%
70～79歳	139	25.0%
80歳以上	43	7.7%
無回答・不明	2	0.4%
合計	555	100.0%

(2) 性別	度数	%
男	240	43.2%
女	304	54.8%
無回答・不明	11	2.0%
合計	555	100.0%

(3) 職業	度数	%
農林水産業	36	6.5%
自営業	63	11.4%
会社員・団体職員	136	24.5%
公務員・教員	24	4.3%
学生	0	0.0%
主婦・主夫	60	10.8%
パート・アルバイト（学生除く）	68	12.3%
無職	149	26.8%
その他	11	2.0%
無回答・不明	8	1.4%
合計	555	100.0%

(4) 多久市での居住年数	度数	%
1年未満	3	0.5%
1～5年	21	3.8%
6～10年	22	4.0%
11～20年	33	5.9%
21～30年	43	7.7%
30年以上	430	77.5%
無回答・不明	3	0.5%
合計	555	100.0%

(5) 現在の居住地	度数	%
筋原	71	12.8%
砂原	119	21.4%
(筋原・砂原以外の) 北多久町	145	26.1%
東多久町	95	17.1%
南多久町	36	6.5%
多久町	61	11.0%
西多久町	20	3.6%
その他	3	0.5%
無回答・不明	5	0.9%
合計	555	100.0%

出所：アンケートデータに基づき筆者作成

表4は、多久市中心市街地の利用について聞いたものである。市中心市街地の利用頻度としては「週に3回以上」という回答が139件(25.0%)、「週に1～2回程度」という回答が137件(24.7%)と約5割の人が週1回は何らかの形で市中心市街地を利用すると回答している。

それに対し表5は、JR多久駅の利用について聞いたものである。「ほとんど行かない」という回答が311件(56.0%)にのぼるのに対し、月に1回以上利用するという回答は1割強にとどまっており、回答者のJR多久駅の利用頻度は低い。よってJR多久駅利用者による市中心市街地利用に与える影響は大きいとは言えない。

表 4 多久市中心市街地の利用頻度

	度数	%
週に3回以上	139	25.0%
週に1~2回程度	137	24.7%
月2~3回程度	103	18.6%
月に1回程度	43	7.7%
年に数回程度	43	7.7%
年に1回程度	5	0.9%
ほとんど行かない	70	12.6%
無回答・不明	15	2.7%
合計	555	100.0%

出所：アンケートデータに基づき筆者作成

表 5 JR 多久駅の利用頻度

	度数	%
週に3回以上	9	1.6%
週に1~2回程度	9	1.6%
月2~3回程度	31	5.6%
月に1回程度	27	4.9%
年に数回程度	122	22.0%
年に1回程度	44	7.9%
ほとんど行かない	311	56.0%
無回答・不明	2	0.4%
合計	555	100.0%

出所：アンケートデータに基づき筆者作成

表 6 は、中心市街地に出かける目的について聞いたものである。最も多い回答は「買い物」で 394 件 (74.5%)、以下「公共サービス (郵便局・銀行など)」が 261 件 (49.3%)、「医療・福祉」が 117 件 (22.1%)、「飲食 (外食)」が 115 件 (21.7%) と続いている。前節において同市の中心市街地は商業の中心性をすでに失ってしまっていることを確認したが、アンケートデータからは住民は依然として中心市街地を買い物の場として認識していることがわかる。

表 6 多久市中心市街地の利用目的 (3つまでの複数回答)

	度数	%
買い物	394	74.5%
公共サービス (郵便局・銀行など)	261	49.3%
医療・福祉	117	22.1%
飲食 (外食)	115	21.7%
イベント・祭・催事への参加	86	16.3%
サービス (理美容など)	80	15.1%
散歩・散策	34	6.4%
公共交通の利用 (駅)	32	6.0%
仕事	30	5.7%
文化活動 (習い事など)	22	4.2%
その他	18	3.4%
有効回答数	529	100.0%

注：無回答・不明は除いた。

出所：アンケートデータに基づき筆者作成

表 7 は、5 年前と比べた多久市中心市街地の利用回数の変化について聞いたものである。この質問は 2014 年 8 月に JR 多久駅に併設された「多久市まちづくり交流センターあいぱれっと」がオープンして以降の駅前周辺の環境変化を想定したものである。回答としては「変わらない」が最も多く 302 件 (54.4%) であった。また「減った」と「少し減った」と回答した人の合計 158 件 (28.5%) は、「増えた」と「少し増えた」と回答した人の合計 91 件 (14.4%) を上回った。

表 7 5 年前と比べた多久市中心市街地の利用回数の変化

	度数	%
増えた	22	4.0%
少し増えた	69	12.4%
変わらない	302	54.4%
少し減った	63	11.4%
減った	95	17.1%
無回答・不明	4	0.7%
合計	555	100.0%

出所：アンケートデータに基づき筆者作成

表 8a は、5 年前と比べた多久市中心市街地の印象の変化について聞いたものである。回答としては「少し良くなった」が最も多く 216 件 (38.9%)、「良くなった」という回答とあわせ肯定的な回答が約 5 割を占めている。

表 8a 5 年前と比べた多久市中心市街地の印象の変化

	度数	%
良くなった	64	11.5%
少し良くなった	216	38.9%
変わらない	179	32.3%
少し悪くなった	40	7.2%
悪くなった	44	7.9%
無回答・不明	12	2.2%
合計	555	100.0%

出所：アンケートデータに基づき筆者作成

表 8b は、属性別のクロス集計を行ったものである。性別では男性よりも女性、年齢別では 40～50 代において肯定的な回答が多い。これらの回答から、中心市街地の利用回数は増えていないものの、中心市街地に対する印象は改善してきていることがわかる。

表 8b 5 年前と比べた多久市中心市街地の印象の変化（属性別）

		良くなった	少し良くなった	変わらない	少し悪くなった	悪くなった	有効回答数
性別	男	9.0%	36.1%	34.3%	9.4%	11.2%	233
	女	13.7%	43.1%	31.4%	6.0%	5.7%	299
年齢層	20～30 代	10.8%	37.8%	51.4%	0.0%	0.0%	37
	40～50 代	12.3%	46.1%	29.9%	4.5%	7.1%	154
	60 代以上	11.7%	37.1%	32.3%	9.4%	9.4%	350
居住地	中心市街地	9.7%	40.3%	32.8%	9.1%	8.1%	186
	その他の市内	12.9%	39.7%	32.6%	6.6%	8.3%	350

注：無回答・不明は除いた。

出所：アンケートデータに基づき筆者作成

表 9a は、品目（サービス）ごとの主な買い物先（サービス利用先）について聞いたものである。買い物先・利用先として多久市内を選ぶ割合が高かったのが「銀行・郵便局」（市内合計 81.3%）、「食料品」（64.0%）、「理容・美容」（57.8%）、「医療・福祉」（54.2%）であり、なかでも「銀行・郵便局」は中心市街地とする回答が 46.8%と高い。それに対し、「食料品」と「飲食」は佐賀市、武雄

市とする回答が多く、大型商業施設等の利用を反映したものと考えられる。また「医療・福祉」と「理容・美容」では、小城市、武雄市、佐賀市などの周辺自治体も選ばれている。

表 9a 主な買い物先（サービス利用先）と交通手段

	食料品	衣料品	飲食	理容・美容	医療・福祉	銀行・郵便局
多久市（中心市街地）	185 33.3%	71 12.8%	102 18.4%	166 29.9%	125 22.5%	260 46.8%
多久市（その他）	170 30.6%	50 9.0%	77 13.9%	155 27.9%	176 31.7%	191 34.4%
佐賀市	9 1.6%	161 29.0%	109 19.6%	52 9.4%	42 7.6%	16 2.9%
小城市	76 13.7%	21 3.8%	35 6.3%	53 9.5%	94 16.9%	19 3.4%
武雄市	56 10.1%	96 17.3%	80 14.4%	29 5.2%	40 7.2%	11 2.0%
佐賀県内（その他）	15 2.7%	44 7.9%	64 11.5%	25 4.5%	33 5.9%	10 1.8%
福岡県	3 0.5%	12 2.2%	8 1.4%	11 2.0%	2 0.4%	3 0.5%
佐賀県・福岡県以外	0 0.0%	3 0.5%	2 0.4%	2 0.4%	0 0.0%	0 0.0%
ネット・通販・宅配	2 0.4%	30 5.4%	1 0.2%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%
買わない	1 0.2%	8 1.4%	12 2.2%	13 2.3%	0 0.0%	1 0.2%
無回答・不明	38 6.8%	59 10.6%	65 11.7%	49 8.8%	43 7.7%	44 7.9%
合計	555 100.0%	555 100.0%	555 100.0%	555 100.0%	555 100.0%	555 100.0%

出所：アンケートデータに基づき筆者作成

表 9b は、買い物（サービス利用）をする際の交通手段について聞いたものである。どの買い物先・利用先においても「自家用車」が 7 割以上を占めた。また、利用先として多久市内を選ぶ割合が高かった「銀行・郵便局」と「理容・美容」では「徒歩」という回答も若干見られた。

表 9b 主な買い物先（サービス利用先）と交通手段

	食料品	衣料品	飲食	理容・美容	医療・福祉	銀行・郵便局
徒歩	21 3.8%	15 2.7%	17 3.1%	42 7.6%	23 4.1%	56 10.1%
自家用車	462 83.2%	420 75.7%	425 76.6%	411 74.1%	452 81.4%	418 75.3%
電車	2 0.4%	8 1.4%	9 1.6%	6 1.1%	2 0.4%	2 0.4%
自転車・バイク	11 2.0%	7 1.3%	7 1.3%	12 2.2%	8 1.4%	14 2.5%
バス	9 1.6%	9 1.6%	7 1.3%	4 0.7%	13 2.3%	7 1.3%
その他	10 1.8%	21 3.8%	14 2.5%	15 2.7%	12 2.2%	8 1.4%
無回答・不明	40 7.2%	75 13.5%	17 13.7%	65 11.7%	45 8.1%	50 9.0%
合計	555 100.0%	555 100.0%	555 100.0%	555 100.0%	555 100.0%	555 100.0%

出所：アンケートデータに基づき筆者作成

表 10a は、中心市街地の活性化の必要性について聞いたものである。「必要だと思う」とする回答は 405 件（73.0%）と高く、活性化の必要性については住民の多くが賛同していることがわかる。

表 10a 中心市街地の活性化の必要性

	度数	%
必要だと思う	405	73.0%
必要だと思わない	46	8.3%
よくわからない	85	15.3%
無回答・不明	19	3.4%
合計	555	100.0%

出所：アンケートデータに基づき筆者作成

表 10b は属性別のクロス集計を行ったものである。年齢層別では 20～30 代と 60 代以上において、居住地別では中心市街地居住者において肯定的な回答が多い。

表 10b 中心市街地の活性化の必要性（属性別）

		必要だと 思う	必要だと 思わない	よく わからない	有効 回答数
性別	男	75.4%	10.8%	13.8%	232
	女	75.6%	6.8%	17.6%	295
年齢層	20～30代	76.3%	10.5%	13.2%	38
	40～50代	71.7%	8.6%	19.7%	152
	60代以上	77.1%	8.4%	14.5%	345
居住地	中心市街地	85.7%	4.9%	9.3%	182
	その他の市内	70.5%	10.4%	19.1%	346

注：無回答・不明は除いた。

出所：アンケートデータに基づき筆者作成

では住民は中心市街地活性化のあり方についてどのように考えているのであろうか。中心市街地が商業の中心というかつての役割を失うなか、近年いくつかの地域ではまちなかの新たな役割が模索されている。その方向性は次の3つに整理することができる。

1 つめは居住の場、生活の場としての役割である。人口減少が進むなか行政コストを抑制するためには人口がある程度コンパクトにまとまっていることが望ましい。そこで比較的利便性が高く暮らしやすい中心市街地が居住の場として注目されている。

2 つめは交流の場としての役割である。定住人口が減少するなか、多くの地域において交流人口の拡大が目指されている。観光のあり方が多様化し、従来型の観光資源のみならず様々なものが観光資源となりうることから、まちなかに残る歴史的資産などを有効活用し観光客を呼び込もうとする試みがなされている。

3 つめは、新しいビジネスの場、創業の場としての役割である。人、物、情報という必要な資源を入手しやすい環境にある中心市街地が、新たな取り組みに挑戦するのに適した場所として選ばれている。

これらをふまえて、表 12a は多久市中心市街地の今後の望ましい姿として、「『多久の顔』として誇りに思える場所」、「魅力的な店舗が多くある場所」、「まちの外からの観光客で賑わう場所」、「芸術・文化に触れあえる場所」、「多様な世代が住む場所」、「医療・福祉施設が充実している場所」、「新たなビジネスが生まれる場所」という7つを挙げて聞いた結果をまとめたものである。

「大いに思う」という回答が最も多かったのは、従来型の中心市街地の姿である「魅力的な店舗が多くある場所」の222件（40.0%）であった。また、「『多久の顔』として誇りに思える場所」、「医療・福祉施設が充実している場所」、「魅力的な店舗が多くある場所」は「大いに思う」と「やや思う」をあわせた肯定的な回答が6割を超えたのに対し、肯定的な回答が最も少なかったのは「まちの外からの観光客で賑わう場所」で5割弱にとどまっている。

表 12a 多久市中心市街地の今後の望ましい姿

	大いに 思う	やや思う	どちらとも いえない	あまり 思わない	全く 思わない	無回答 ・不明	合計
「多久の顔」として 誇りに思える場所	211 38.0%	142 25.6%	94 16.9%	61 11.0%	34 6.1%	13 2.3%	555 100.0%
魅力的な店舗が多 くある場所	222 40.0%	125 22.5%	77 13.9%	76 13.7%	43 7.7%	12 2.2%	555 100.0%
まちの外からの観 光客で賑わう場所	151 27.2%	116 20.9%	118 21.3%	100 18.0%	49 8.8%	21 3.8%	555 100.0%
芸術・文化に触れあ える場所	115 20.7%	180 32.4%	110 19.8%	90 16.2%	41 7.4%	19 3.4%	555 100.0%
多様な世代が住む 場所	160 28.8%	143 25.8%	124 22.3%	66 11.9%	38 6.8%	24 4.3%	555 100.0%
医療・福祉施設が充 実している場所	211 38.0%	138 24.9%	88 15.9%	71 12.8%	34 6.1%	13 2.3%	555 100.0%
新たなビジネスが 生まれる場所	160 28.8%	147 26.5%	106 19.1%	78 14.1%	49 8.8%	15 2.7%	555 100.0%

出所：アンケートデータに基づき筆者作成

また表 12b は、中心市街地の今後の望ましい姿ごとに、属性別のクロス集計を行ったものである。属性別の特徴を見ると、「『多久の顔』として誇りに思える場所」は、性別では男性、年齢層別では 20～30 代および 60 代以上、居住地では中心市街地において肯定的な回答の割合が高い。「魅力的な店舗が多くある場所」は、性別では女性、年齢層別では 20～30 代および 40～50 代において肯定的な回答の割合が高い。「まちの外からの観光客で賑わう場所」は、性別では女性、年齢層別では 20～30 代および 40～50 代において肯定的な回答の割合が高い。「芸術・文化に触れあえる場所」は、性別では女性、年齢層別では 40～50 代において回答の割合が高い。また男性と女性の肯定的な回答の割合の格差が最も大きい。「多様な世代が住む場所」は、性別では女性、年齢層別では 40～50 代、居住地では中心市街地において肯定的な回答の割合が高い。また中心市街地居住者とその他居住者の肯定的な回答の割合の格差が最も大きい。「医療・福祉施設が充実している場所」は、年齢層別では高齢層ではなく 20～30 代において肯定的な回答の割合が最も高く、40～50 代も高い。「新たなビジネスが生まれる場所」は、性別では女性、年齢層別では 20～30 代および 40～50 代において肯定的な回答の割合が高い。

表 12b 多久市中心市街地の今後の望ましい姿（属性別）

「多久の顔」として誇りに思える場所

		大いに 思う	やや思う	どちらとも いえない	あまり 思わない	全く 思わない	有効 回答数
性別	男	38.9%	28.2%	12.4%	11.5%	9.0%	234
	女	39.7%	24.6%	20.5%	10.8%	4.4%	297
年齢層	20～30代	48.6%	18.9%	10.8%	16.2%	5.4%	37
	40～50代	37.4%	25.8%	21.3%	9.0%	6.5%	155
	60代以上	38.8%	27.3%	16.1%	11.5%	6.3%	348
居住地	中心市街地	44.4%	24.6%	16.6%	9.6%	4.8%	187
	その他の市内	36.3%	27.1%	17.3%	12.1%	7.2%	347

魅力的な店舗が多くある場所

		大いに 思う	やや思う	どちらとも いえない	あまり 思わない	全く 思わない	有効 回答数
性別	男	39.0%	24.2%	13.0%	13.4%	10.4%	231
	女	43.2%	22.3%	14.6%	13.6%	6.3%	301
年齢層	20～30代	63.2%	26.3%	2.6%	5.3%	2.6%	38
	40～50代	43.5%	29.2%	13.0%	7.1%	7.1%	154
	60代以上	37.5%	20.1%	15.5%	18.1%	8.9%	349
居住地	中心市街地	47.0%	18.9%	14.6%	12.4%	7.0%	185
	その他の市内	37.7%	25.4%	13.7%	14.6%	8.6%	350

まちの外からの観光客で賑わう場所

		大いに 思う	やや思う	どちらとも いえない	あまり 思わない	全く 思わない	有効 回答数
性別	男	28.8%	17.7%	22.6%	18.1%	12.8%	226
	女	28.2%	25.2%	20.5%	19.5%	6.7%	298
年齢層	20～30代	31.6%	26.3%	26.3%	13.2%	2.6%	38
	40～50代	29.4%	24.8%	24.2%	11.8%	9.8%	153
	60代以上	27.6%	19.9%	20.2%	22.6%	9.7%	341
居住地	中心市街地	32.0%	19.3%	21.5%	18.2%	8.8%	181
	その他の市内	26.6%	23.1%	22.0%	18.8%	9.5%	346

芸術・文化に触れあえる場所

		大いに 思う	やや思う	どちらとも いえない	あまり 思わない	全く 思わない	有効 回答数
性別	男	17.7%	29.6%	23.9%	18.6%	10.2%	226
	女	24.7%	36.0%	18.0%	15.3%	6.0%	300
年齢層	20～30代	23.7%	28.9%	26.3%	18.4%	2.6%	38
	40～50代	19.6%	39.2%	19.0%	14.4%	7.8%	153
	60代以上	22.2%	31.5%	20.4%	17.8%	8.2%	343
居住地	中心市街地	32.0%	19.3%	21.5%	18.2%	8.8%	181
	その他の市内	26.6%	23.1%	22.0%	18.8%	9.5%	346

多様な世代が住む場所

		大いに 思う	やや思う	どちらとも いえない	あまり 思わない	全く 思わない	有効 回答数
性別	男	29.6%	24.3%	22.6%	15.5%	8.0%	226
	女	30.8%	29.2%	23.7%	9.5%	6.8%	295
年齢層	20～30代	44.7%	13.2%	26.3%	13.2%	2.6%	38
	40～50代	31.6%	34.2%	20.4%	6.6%	7.2%	152
	60代以上	28.0%	25.1%	24.2%	15.0%	7.7%	339
居住地	中心市街地	38.3%	25.6%	20.6%	9.4%	6.1%	180
	その他の市内	26.2%	27.6%	24.1%	14.2%	7.8%	344

医療・福祉施設が充実している場所

		大いに 思う	やや思う	どちらとも いえない	あまり 思わない	全く 思わない	有効 回答数
性別	男	36.2%	27.2%	15.5%	13.4%	7.8%	232
	女	41.8%	24.1%	15.4%	13.4%	5.4%	299
年齢層	20～30代	60.5%	21.1%	5.3%	13.2%	0.0%	38
	40～50代	40.8%	27.0%	16.4%	8.6%	7.2%	152
	60代以上	36.0%	25.1%	17.1%	15.1%	6.6%	350
居住地	中心市街地	44.6%	23.1%	12.4%	13.4%	6.5%	186
	その他の市内	35.8%	26.4%	18.3%	13.2%	6.3%	349

新たなビジネスが生まれる場所

		大いに 思う	やや思う	どちらとも いえない	あまり 思わない	全く 思わない	有効 回答数
性別	男	26.8%	28.5%	20.2%	13.6%	11.0%	228
	女	32.9%	25.9%	17.6%	15.6%	8.0%	301
年齢層	20～30代	36.8%	31.6%	21.1%	5.3%	5.3%	38
	40～50代	31.2%	31.8%	22.1%	7.1%	7.8%	154
	60代以上	28.3%	24.6%	18.2%	18.8%	10.1%	346
居住地	中心市街地	32.1%	28.3%	16.3%	15.8%	7.6%	184
	その他の市内	28.4%	26.9%	20.6%	14.0%	10.0%	349

注：無回答・不明は除いた。

出所：アンケートデータに基づき筆者作成

最後に、中心市街地の回遊性創出に向けて古い建物や歴史的資源のリノベーションを実施すると仮定し（図7）、その場合に許容できる投資負担額について問うた。その結果をまとめたものが表13a、属性別のクロス集計を行ったものが表13bである。


「2,000円の投資でも賛成できる」とする肯定的な回答が最も多かったが（213件、41.0%）、「500円の投資でも賛成できない」とする否定的な回答もそれに次いで多かった（131件、25.2%）。属性別の特徴を見ると、男性では「2,000円の投資でも賛成できる」とする回答と「500円の投資でも賛成できない」とする回答の両方が多かった。また居住地別では中心市街地居住者において肯定的な回答が多かった。

図7 中心市街地の回遊性創出に向けたリノベーションについて


【説明】
台湾では、地方都市の再生事業の核に「芸術を活用した産業遺構のリノベーション（改修・再生・活用）」を掲げています。実際、1900年代の産業遺構に、当時の歴史ストーリーを活かしながら、店舗やギャラリーを入れて回遊性を高めた大規模改修を実施し、地域内外の人々を引き付けています。

例えば、台湾のローカル線の1つ集集（シュウシュウ）線の車埕（シャテイ）では、旧製材所を改修・活用し、賑わいの創出に成功しています。また台南市の安平樹屋（アンピンジュヤ）では、旧製塩会社の倉庫を改修し、アートスペースとして活用されています。

多久市においても、このように古い建物や歴史的な資源のリノベーションを行うことで、中心市街地の回遊性を高め、観光客を呼び込むことを想像してください。



車埕



安平樹屋

出所：多久市中心市街地に関するアンケート調査票

表 13a 中心市街地の回遊性創出に向けたリノベーションへの投資

	度数	%
2,000 円の投資でも賛成できる	213	41.0%
1,000 円の投資なら賛成できる	115	22.1%
500 円の投資なら賛成できる	61	11.7%
500 円の投資でも賛成できない	131	25.2%
有効回答数	520	100.0%

出所：アンケートデータに基づき筆者作成

表 13b 中心市街地の回遊性創出に向けたリノベーションへの投資（属性別）

		2,000 円でも 賛成できる	1,000 円なら 賛成できる	500 円なら 賛成できる	500 円でも 賛成できない	有効 回答数
性別	男	45.8%	16.0%	8.9%	29.3%	225
	女	36.5%	25.3%	13.5%	24.7%	288
年齢層	20～30 代	40.5%	13.5%	16.2%	29.7%	37
	40～50 代	39.9%	22.3%	10.8%	27.0%	148
	60 代以上	40.7%	22.0%	11.3%	26.1%	337
居住地	中心市街地	42.5%	24.3%	12.2%	21.0%	181
	その他の市内	39.7%	19.7%	11.0%	29.6%	335

注：無回答・不明は除いた。

出所：アンケートデータに基づき筆者作成

4. おわりに

本稿では多久市中心市街地について、統計データによる経時的変化と相対的な位置づけの把握、およびアンケート調査による多久市民の中心市街地の利用状況、中心市街地の印象、評価、将来像の把握を行った。住民アンケートからは、中心市街地の利用頻度は高くはないものの、中心市街地に対する印象は改善されており、活性化の必要性についても一定の支持が得られることがわかった。しかしその一方で、中心市街地の現状や今後のあり方についての理解は必ずしも十分とは言えないことも明らかとなった。

近年いくつかの地域ではまちなかの新たな役割が模索されていることに上で触れたが、それらに見出された3つの方向性は、今後の多久市のまちなかのあり方を考えるうえでも示唆を与えてくれる。まず居住の場、生活の場という点では、すでに多久市中心市街地は、相対的には多様な世代が暮らす地域となっている。こうしたまちなか居住者を重視したまちづくりをすすめることは多久市中心市街地の今後のあり方の1つとなりうる。交流の場という点では、現在取り組まれているウォールアートプロジェクトは、老朽化した建物の景観改善とともにアートの方で市外から人を呼びこむことを目指したものであ

り、JR 多久駅に併設された「あいぱれっと」は、日常的には市民に憩いの場、イベント時には市内外から人々が訪れる機会を提供している。また同プロジェクトでは、佐賀大学芸術地域デザイン学部有馬研究室によりまちなか観光の促進に関する提案が示されているが、こうしたまちなかの既存資源を活かした観光客誘致も1つの方向性として考えられる。

さらに新しいビジネスの場、創業の場という点では、近年多久市のまちなかには、新たな店舗が立地しており、クラウドソーシングなどの働き方を提供する「多久市ローカルシェアリングセンター」も設立されている。つまり多久市において新たなことに挑戦するのに最も適した場所として、中心市街地は位置づけられようとしている。

そして、まちなかのあり方をこのように変えていくうえで重要となるのが住民の関心と理解である。住民がまちなかに関わる機会や足を運ぶ機会を増やし、まちなかの新たな役割やその価値について十分な理解や賛同を得ていくことが求められる。

注

(注1) 中心市街地の設定方法には、自治体により違いがある。ここでは各自治体に照会した、現時点で中心市街地として位置づけられている範囲にならい、国勢調査の小地域における該当地域、商業統計調査の商業集積地区における該当地域の設定を行った。

(注2) 国勢調査の小地域データが存在する1995年以降を分析対象とした。

参考文献

多久市 (2015) 『多久市まち・ひと・しごと創生人口ビジョン』(2015年10月) (<https://www.city.taku.lg.jp/uploaded/attachment/5683.pdf>)